

氏名(本籍)	はっ とり くに かず 服 部 訓 和 (埼玉県)		
学位の種類	博 士 (文 学)		
学位記番号	博 甲 第 4877 号		
学位授与年月日	平成 21 年 3 月 25 日		
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当		
審査研究科	人文社会科学研究科		
学位論文題目	大江健三郎小説研究——一九七〇年前後まで——		
主 査	筑波大学教授	博士(文学)	新 保 邦 寛
副 査	筑波大学教授	博士(人文科学)	清 登 典 子
副 査	筑波大学教授	博士(文学)	松 本 肇
副 査	筑波大学准教授	博士(学術)	秋 山 佳奈子
副 査	筑波大学准教授	博士(文学)	谷 口 孝 介

論 文 の 内 容 の 要 旨

本論文は、主として 1960 年代の大江健三郎の創作活動に焦点を当て、彼の代表作や問題作の生成過程を問うことをもって、同時代の政治・社会・文化情況と係わりつつ自らの主体を模索し、かつ創作方法を鍛え上げていく作家のありように迫ろうと目論むものである。

本論文の構成は、以下の通りである。

序章

第 I 部 戦後と青年——一九六〇年前後

第一章 「暗黒の淵」を象るもの—「孤独な青年の休暇」と「若い日本の会」

第二章 「天皇陛下」が「鬼」に変わる—「遅れてきた青年」

第 II 部 内面と身体——一九六〇年代

第一章 「自転車」の速度—「個人的な体験」

第二章 「躰」という表現形式—「万延元年のフットボール」

第 III 部 転換期と言葉——一九七〇年前後

第一章 「あの人」を問うこと—「みずから我が涙をぬぐいたまう日」

第二章 「言葉」のかたち、「鯨」のかたち—「^{ムーン・マン}月の男」

終章

序章では、大江の作品の特徴とされる〈奇怪なイメージ〉が、彼の特異な想像力の産物ではなく、戦後社会の変革を担わねばならなかった青年の、同時代情況に対する違和感の表現であり、それ故それこそが作品解釈の鍵になっていることを指摘しつつ、一方で従来の研究がはまっている陥穽、すなわち大江の政治的発言に呪縛されてしまっていたり、あるいは自らの批評課題に都合のよい部分を照らし出したりする傾向を厳しく戒めている。

本論は三部構成で、第 I 部において自らの主体を置き去りにされ停滞を余儀なくされた戦後世代の〈青年〉を描いた作品を取り上げている。第一章では、単なる政治運動としか見做されてこなかった〈若い日本

の会>が、こうした停滞状況を打破すべく文化・社会の変革を模索した集まりであったことを立証し、そうした運動と連動する形で行われたとして、大江の創作が位置付けられている。それ故、都会で、の自己疎外から逃走した青年を描く「孤独な青年の休暇」の主人公が陥った<暗い穴>とは、彼の内面のそれであるばかりか、同時代の青年が共有した陥穽としてある、という次第である。続く第二章で扱われる「遅れてきた青年」では、戦後民主主義の曲がり角となった<60年安保>の頃、同性愛者の青年によって顧みられた戦後の物語という枠が重視される。彼は、敗戦によって主体を奪われた少年期に、その回復を天皇に求めるものの、その天皇も占領下において主体を喪失していたために自らの主体も屈折を強いられる人物だが、すべてを性的パラダイムに変換せずにはいられないため、同性愛者になる他なかったとする。結末の青年のグロテスクで不可解な夢も、そうした戦後の同性愛的状況の比喩として読め、そうした状況を引き受ける覚悟を示す大江のメッセージに他ならないという。

第Ⅱ部では、高度経済成長下の日本における主体の困難をめぐって書かれた作品が取り上げられている。第一章は、障害者の我が子の誕生をテーマとした私小説と見做される「個人的な体験」が、公害やサリドマイド児への大江の眼差しを分有する作品であり、そうした暴走する文明への違和感から停滞を余儀なくされ、その一方で<未開>への遁走を夢想する主人公の、障害児誕生を契機に彼と生きる時間の刻みに主体のありようを見出していく話と述べられる。第二章で論じられる「万延元年のフットボール」は、語り手の友人のグロテスクで奇怪な死に始まり、その死に方を理解したアメリカ帰りの語り手の弟が、消費社会に蚕食される故郷で暴動を起こし、揚句に<本当の事>と叫びつつやはり奇怪な自死を遂げることで閉じられる話である。この時代に顕在化する、自らの肉体を縛る近代の様々の物語が与える苦痛や、それからの解放を求めるヒッピーの行為などが想起される文脈を思えば、二人の死は、正に自らの主体の奪還であり、その死に方を通して近代の異様さを照らし出すことこそ、<本当の事>の意味だったと述べている。

第Ⅲ部においては、そうした近代の物語それ自体が無効となっていく時代を測鉛した作品が問題にされている。第一章「みずから我が涙をぬぐいたまう日」論では、こうした時代の激変に旧来の言葉が対応できなくなった事態を捉えているが、天皇を含意する<あの人>の少年期の記憶を再現しようとする分裂病と思しき小説家の企て、しかも彼の記憶を次々訂正する母の眼差しを積極的に取り込むようになされるその企てこそ、<あの人>を肉体性を帯びた新たな言葉に変えようとする試みに他ならないと論じている。続く第二章「^{ムーン・マン}月の男」論では、その「みずから我が涙をぬぐいたまう日」の書き手を語り手に設定する構造に着目する。そこで語られる、語り手たる私の引き裂かれた主体を映し出す鏡でもあるユダヤ系アメリカ人が、アメリカ的想像力の導くままに來日し、<あの人>に救いを求め、その揚句に私が話した小説の主人公の物語を真に受け、共に<あの人>によって救済されるシナリオを語り出す。私はそのユダヤ系アメリカ人の語る<あの人>ならぬ<あの人>をあえて受け入れることで自らが変貌する契機とした、と論じている。

終章において1970年代以降の大江の小説が、主題・方法・発表形式などが大きく変わってしまっている事態に言及しつつ、本論文を書き進めてきた結果、その本質に変わりはないとの視座が開けてきたことを報告し、結論としている。

審 査 の 結 果 の 要 旨

ノーベル賞受賞作家である大江健三郎の作品に言及する論考は数多い。しかし著者も序章で厳しく批判するように、大江の自注的発言を準るような論や、自説に都合のよい部分のみ照らし出す類の批評に占められているのが現状である。確かに現役作家の作品を本格的な研究対象とするのは難しく、多くの問題点が考えられるだろう。著者が採った方法は、作品が生成される場を問うことであり、そのために古典的な注釈作業を徹底的に行うことであった。その成果は目覚しいものがあり、「孤独な青年の休暇」では、それが江藤淳

らと立ち上げた＜若い日本の会＞の社会的文化的活動の一環として構想された、遂行的性格の作品であることを論証し、「月の男」では、アメリカ文学の受容や度重なるアメリカ旅行を通してメルヴィルの「白鯨」がアメリカ的想像力の源泉であることを痛感した大江が、それに凭り掛りつつ主人公のユダヤ系アメリカ人を造型していく事態を、鮮明に浮かび上がらせている。正に大江の創作の内幕に迫る画期的な研究として高く評価できる。また、こうした方法が、現役作家の作品を本格的に分析する方法として極めて有効であることは、「月の男」論と同様の論法で成り立つ「万延元年のフットボール」論が、論文の質のみならず、その方法の先駆性をも評価の基準とする学会誌『日本近代文学』に掲載されたことにも窺えよう。

さらに、こうした重要作品の生成を丹念に解き明かしていく作業を積み重ねた結果、時代の現実に即応した主体のありようを模索した点に大江の創作がかけられている点が露になり、高度大量消費社会が進行する中で次第に言語ゲーム化していく文学の現況に対し、常に同時代の豊かな物語作家でありつつ、一方でしたたかに＜近代文学作家＞としての歩みを刻み続けていた点が確認されていることは重要である。それは終章に言うように、社会や文学の状況がより深刻になる1970年代以降においても大江のスタンスに変わりがなかった可能性をも示唆し、加えて、日本現代文学の性格を考える上で、大切な視座を提供するものでもある。

とはいえ、瑕瑾がないわけではない。こうした注釈作業によって顕現する同時代の社会や文化の実態と、それを取り込みつつ構想される大江の作品世界との関係は一筋縄ではいかない。幾重にも屈折したその関係を論じて説得力を持たせるには、相応の手際を要するが、その点にやや難のある論がないではない。ただし、全体の論旨に障りがあるわけではないので、今後この方法にいっそうの磨きをかけ、大江の現在に迫ってほしい。それは、数ある大江研究者の中で著者のみができることと確信する。本論文によって、日本近・現代文学研究が確実に一歩前進したことは疑いない。

よって、著者は博士（文学）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。